

ここで、此の句は前に述べたやうにあつたならば、神様がきつと、其の人に向つて、御めぐみを御下し遊ばされるさいふ意である。

(括意) 人が、もし、修行をして、其の心の鏡を曇らす所の、八つの埃を除き去つて、神様から賦り與へられたる、本来のもちまへに立ち歸つて、明かなる徳を存じ、現在、目に見ゆる、此の世の中にあつて、天皇陛下を始め、奉り、父母長上によく事へて、人倫の道を全くし、目に見ぬ幽冥に對しては、よく、神様に御つかへ申して、崇敬の誠を致し、其の事ふる所の方法を取り違へるこごがなく、すべての行が、完全圓滿あつたならば、神様が、きつと、其の人に向つて、御めぐみを御下し遊ばされるこごである。

惠愛とは、一切の禍害を脱却し、生死共に、靈魂長く、
愉快の天賚を全うせしめ、無限の慶福を與ふるの
謂也。

敬愛とは、一切の禍害を脱却しこある、一切とは、すべて、残らずさいふ意、禍害の禍は、ワザハヒ、害は、ソコナヒこ訓み、禍害とは、病氣災難等、人のわざはひとなり、そこなひこなるものをいふ。脱却は、又ギシリゾクこ訓みて、まぬかるこご。此の句より以下、與ふるの謂也。さいふまでは、惠愛さいふこごを、事實にて説かれたので、惠愛とは、いかなるこごかご申せば、人間の身における、すべて、残らずの、病氣災難等の禍害をまぬかれてさいふ意である。生死共に、靈魂永く、愉快の天賚を全うせしめこあ

る、生死せいじは、イキシニい訓しんみて、生いきて、此この世よに在ある間あひだでも、死いんで、幽う冥めいに歸かへつても、こいふ意い。愉ゆ樂らくは、ヨロコビタノシムよ訓しんみて、常とこに、安あ心んして、喜きばしく、樂あしき有あ様さまを申ますのである。天てん賚さいの賚さいは、タマモノた訓しんみて、天てんよりのたまもの、即すなはち、神かみ様さまよりの下くだされものご申ます意いである。全まうせしめめさは、缺くくる所ところなく、完くわん全ぜんに得えさするこいふ意いで、少せうしも、不ふ快くわいの心こころ、不ふ安あんの念ねんなく、十じゅう分ぶん愉ゆ樂らくなる境まはりに居ゐるをいふ。そこで、此この句くは、生いきて此この世よに在ある間あひだでも、死いんで、幽う冥めいに歸かへつても、ごちらでも、共ともに、變かはるここなく、靈れい魂こんが、長ながく久ひさしく、一ひとの大だい安あん心んを得えて、常とこに、常とこに、よよろこびたのしむこいふ、神かみ様さまからのたまものを、缺くくる所ところなく得えさせて下くだされて、こいふ意いである。

る。無限むげんの慶けい福ふくを與あたふるの謂い也なりとある、慶けい福ふくの慶けいは、ヨロコビ、福ふくは、サイハヒさ訓しんむ字じである。そこで、此この句くは、前まへに述のべたる如ごとくにして、限かぎりの無ない、よよろこびさいはひを、神かみ様さまが御ご與あたへ下くださるのをば、惠け愛あいと申ますのである。こいふ意いである。

(括意) 惠け愛あいとは、いかなる事ことを申ますぞこいふに、人ひと間の身みにおける、すべて、殘のこらずの、病びやう氣き災さい難なん等らうの禍わざはひ害はをまぬかれて、生いきて、此この世よの中なかに居ゐる間あひだでも、死いんで、幽う冥めいに歸かへつても、ごちらでも、共ともに、變かはるここなく、靈れい魂こんが、長ながく久ひさしく、一ひとの大だい安あん心んを得えて、常とこに、よよろこびたのしむこいふ、神かみ様さまからのたまものを、缺くくる所ところなく得えさせて、下くだされて、限かぎりの無ない、よよろこ

びさいはひを、神様が御與へ下さる事をば、惠愛ご
 は申すのである。
 古へに之を、神の恩頼を被むると云ふ。即ち天理大
 神の靈光其心魂に満ち、罪惡を斥け、善功を進め給
 ふに因る。

古へに、之を、神の恩頼を被むること云ふごある、古へ
 は、往にし方ごいふ語の義で、過ぎ去りし方、即ち昔
 の事を申すのである。之ごは、前に見ねたる、惠愛の
 事實で、即ち一切の禍害をまぬかれて、生きて居る
 間も、死んでの後も、共に、靈魂が、長く、久しく、愉び樂
 むごいふ、神のたまものを、全く受け得て、限りなき
 幸福にあづかることを指して申すのである。恩頼
 ごいふ語の意は、ミタマは、御靈にて、神様の御靈徳

を申し、フユごは、殖ゆごいふ義で、ふね増す事を申
 し、恩頼を被むるごは、神様の御靈が、その人の心の
 中にふね加はつて、神様ご同化するごを申すの
 である。そこで、此の句ば、昔の語に、此の、惠愛を受け
 るごをば、神様の恩頼を被るご申すごいふ意に
 なるのである。
 即ち、天理大神の靈光其心魂に満ちごある、靈光ご
 は、クシビノヒカリご訓みて、靈妙なる御徳を申す
 のである。其ごは、前に見ねたる、心の塵埃を被ひ去
 つて、神様より賜はつたまふの、本來の、明かなる徳
 ごなつたる人を指して申すのである。満ちごは、一
 ばいになるご。此の句は、前に恩頼を被むるご申
 された理由を説かれたので、恩頼を被るご申した

のは、いかなる理由であるかご申せば、取りも直さず、宇宙萬有の主宰ごましまして、我等人類を御恵愛下される所の天理大神の御靈の光、即ち御靈徳が、塵埃を被ひ去つて、天賦の本性に歸つたる人の心魂の中に、一ばいになつて、神様ご一つ徳ごなつて、ごいふ意である。是即ち前の章に見ゆたる、神魂貫通の理である。人の靈魂は、もご、神より賜はつたるもので、神靈ご異つたもので無いが、人が自ら、慾心をおこし、八つの埃をかもして、神靈ご隔たつて居るのであるが、一たび悟つて、其の心の隔てごなつて居る所の塵埃を除き去つたならば、神の靈光は、直に、その人の心の中にさしこんで、次第に、神靈の光は増し殖々、充ち満ちて、遂に、神ご同化するこ

ごが出来るのである。罪惡を斥け、善功を進め給ふに因るごある、斥けごは、のけ去ること、善功の功は、こゝにては、ワザ、ツトメなごいふ義で、善功ごは、即ち、善事ごいふに同じである。進むごは、益しすゝむること。そこで、此の句は、其の人の心の中には、神様の御靈徳が満ち、く、て、その神靈の御はたらきで、其の人の身に、罪惡の近づくごごなく、之をのけ去つて、善きつごめを、ますます、多く行はしめるやうにさせて下さるに因つて、神の恵愛を受けるところをば、恩頼を被るごは申したのであるごいふ意になるのである。(括意) 昔の語に、此の、恵愛を受くるごご、即ち、一切その身の禍害ごなるものを除き却けて、生きてあ

る間も、死んでの後も、共に、變ることなく、靈魂に、大
 安心を得て、愉び樂むさいふ、神様からのたまもの
 を、全く受け得て、限りなき幸福にあづかることを
 ば、神様の恩頼を被るご申したのである。なぜ、かや
 うに申したかご云へば、取りも直さず、宇宙萬有の
 主宰さましく、我等人類を御惠愛下さる所の
 天理大神の、靈なる光、即ち御靈徳が、塵埃を、被ひ去
 つて、天賦の本性に歸つた人の、心魂の中に、一ばい
 になつて、神様ご、一つ徳ごなつて、神靈の御はたら
 きで、その人の身に、罪惡の近づくことなく、之をの
 け去つて、善きつごめを、ますく、多く行はしめる
 やうにさせて下さるに因つて、神の惠愛を受け
 ことをば、恩頼を被るご申したのである。

故に、人類たるものは、造次顛沛も、神恩の洪大なる
 を忘れず、其惠愛を得んことを期し、至誠息まざる
 の心を以て、尊信敬仰すべし。

故に、人類たるものは、故には、本章の冒頭の
 「人若し、心埃を去り、神明賦與の本性に歸り、顯幽に
 事へて、其道を愆らずむば、神明必ず、惠愛を垂れ給
 ふ」とある一節の文の意を受けて、斯様のわけであ
 るからして、下に言ひつゞけられたのである。そ
 こで、此の句ば、かやうに、人が、心の塵埃を去つて本
 來の明德に歸れば、神様が、必ず御惠愛を下さるご
 いふわけであるからして、人の類ごあるものは、誰
 でも、さいふ意になるのである。
 造次顛沛も、神恩の洪大なるを忘れずごある、造次

とは、あわたゞしく、一寸した場合をいひ、顛沛とい
 たふれさすらふる際といふことで、造次顛沛とい
 へば、いついかなる場合でもといふ意になるので
 ある。洪大の洪も、オホイナリと訓みて、洪大と云へ
 ば、甚だ大いなることである。そこで、此の句は、人た
 るものは、いついかなる場合でも、神様の御めぐみ
 の、甚だ大いなるものであるといふことを、心にし
 めて、忘れずに居て、いふ意である。人がかやうに、
 此の世の中に生まれ来たご申すは、何によるかご
 云へば、實に、神様の、厚い思召しである。而して、人が
 心の埃を除いて、本來の徳に歸れば、神様は、必ず、恵
 愛を垂れて、生死共に、靈魂の上に、長く、久しく、愉
 樂を垂れて、生死共に、靈魂の上を受けさせて下されることは、

前に述べられた通りである。生死を通じて、靈魂が、
 一大安心を得て、愉樂の境に住すといへば、此の上
 の幸福はなく、此の上の希望は無かるべきである。
 我々は、神様のおかげで、此の世に生まれ、而して、神
 様は無上の幸福を與へて、希望をかなへさせて下
 される。思へば、神恩は實に、限りもなく洪大である。
 そこで、かやうに申されたのである。
 其恵愛を得むことを期しごある、其ごは、神様を指
 して申された語、期しごは必ず、ごねがひもごむる
 こと。そこで、此の句は、常に、神恩の洪大なるを忘れ
 ずして、必ず、神様の御恵愛を、我が身に受け得よう
 ごねがひもごめて、いふ意である。神恩の洪大な
 ることを思つても、之を我が身に受け得んことを

心がけねば、詮の無いことでもし、之を得んことを望まなかつたならば、實は、まことに、神恩の洪大なるを感じぬものといふべきである。又、之を希ひ望むにおいて、人間の向上といふこともあり、社會の進歩發達といふことも起るのである。

至誠息まざるの心を以て、尊信敬仰すべしとある。至誠は、前にもある通り、至り極まれる誠の心息まざることは、始終たぬまなきをいふ。尊信敬仰は、尊敬信仰といふことと同じである。此の句は、神様の惠愛を得る方法を示されたので、神様の惠愛を受けよう。心かけたならば、すこしも、濁りなく、曇りなき、至り極まれる誠の心を、始終、間斷の無いやうに持ちつゞけて、その心で、神様を尊び敬ひ、信仰すべきで

あるといふ意である。至誠息まざる心を養ふは、即ち、本章の首に見ゆるが如く、心の埃を去つて、神明賦與の本性に歸るのである。是、即ち、神の惠愛を得る方法なのである。

(括意) かやうに、人が、心の埃を除き去つて、本來の明德に歸れば、神様が、必ず、おめぐみを下さる。こいふ譯であるからして、人の類ごあるものは、誰にても、いつ、いかなる場合でも、神様の御めぐみの、甚だ大いなるものである。こいふことを、心にしめて、忘れずに居て、我が身にも、必ず、神様の御めぐみを受け得よう。こねがひも、こめて、すこしも、濁りなく、曇りなき、至り極まれる誠の心を、終始、間斷の無いやうに持ちつゞけて、その心で、神様を尊び敬ひ、信仰

すべきである。
 自己既に恩頼を被むることを得ば、また、他人を誘導して、此の眞教に歸せしめ、共に、神恩に浴せしむべし。此れを報恩の道と云ふ。

自己既に、恩頼を被むることを得ば、ある自己は、己自身といふことにて、此の句は、己自身が、早く、既に、神様の御かけを被ることを得たならば、こいふ意である。
 また、他人を誘導して、此の眞教に歸せしめ、ある、誘導とは、イザナヒミナヒクと訓みて、さうして、手びきをする、こと、眞教は、マコトノナシへと訓みて、本教の事を申すので、本教は、神の定め給うた、眞の理を教ふるものであるから、かく申されたのである。

る。歸せしめ、こは、本づきよらしめるといふことで、本教の信者ならしめることである。そこで、此の句は、己自身が、神様の恩頼を被れば、それでよいとせないで、また、別に、他の人をさそつて、手びきを、して、此の、天地間の、眞の理を説く所の、我が教に本づきよらしめて、この教會の信者として、こいふ意である。
 共に、神恩に浴せしむべしとある、浴すとは、水などをあびること、こゝでは、かうむるこいふに同じく、その身に受けることをいふのである。そこで、此の句は、他の人も、自分ごとも、く、に、神様の御恩をかうむるやうにさすべきである、こいふ意である。此れを、報恩の道と云ふとある、此れは、前の、他人

を誘ひ導いて、我が教會の信者ごすることを指し
 て申し、報恩ごは、メグミニムクユごいふ字で、神様
 の御恩に對して、御返禮をするごいふ意である。そ
 こで、此の句は、かやうに、他人を誘ひ導いて、我が教
 に本づきよらしめて、神様の御恩をかうむるやう
 にさせるごいふことをば、我が身が受けた、神様の
 御恩に對して、御返禮を申し上げる所の道ご申す
 ことちやごいふ意である。およそ、恩ごいふものは、
 只、心によつて、存するもので、心には、是はありがたい、
 辱いご感ずるによつて、恩ごいふものがあるので、
 もし、此の心が無かつたならば、恩ごいふものは無
 いのである。故に、恩ごいふ字は、之を分てば、心に因
 るごいふことになる。神様の御恩は、申すに及ばず、

皇室の御恩、父母の恩、長上の恩、朋友の恩、乃至、他人
 の恩ごいふも、皆、之を心に感ずるによつて存する
 ものである。然るに、人は、至つて淺はかなもので、た
 まさか、で、小さい恩には、感じ易いけれども、常に、た
 めまのない、大いなる恩には、感じのうすいもので
 ある。俗の諺に、**「灯燈を借りた恩は知れども、お日様**
の恩は知らぬごいふ事もある。そこで、たまさかに、
 他人より蒙りたる恩義は、之を忘れずして、常に、間
 斷のない、父母の恩、皇室の御恩、神様の御恩ごいふ、
 大いなるものに至つては、却つて、之を、等閑にする
 ごいふ傾のあるものであるから、よく、心にし
 めて、此の大恩を忘れぬやうにせねばならぬ。殊に、
 神様は、目に見奉るごこの出来ぬもの故に、ごもす

れば、その御恩を疑ふやうなことがある。是は實に、
 以ての外の事である。さて、すでに此の恩を感じた
 る上は、必ず之に報ゆるこいふ心がけが無ければ
 ならぬ。之に報ゆる心が無いならば、是は眞に、恩を
 感じたものさはいはれぬのである。そこで、君父の
 恩に報ゆるには、忠孝の道があり、神様の御恩に報
 ゆるには、尊信敬仰する外、神の寵兒たる我等同胞
 を誘導して、同じく、神恩に浴せしめ、神の平等に、我
 等に慈愛し給ふ大御心を體して、同胞相愛の義を
 盡すこいふ道があるのである。

括意 己自身が早く、すでに、神様の御恩頼を被る
 ことを得たならば、己自身だけでよいとせないうで、
 また、別に、他の人をさそつて、手びきをして、此の天

地間の、眞の理を説く所の、我が教に本つきよらし
 めて、この教會の信徒として、他の人も、自分と共に、
 神様の御恩をかうむるやうにさすべきである。か
 やうに、他人を誘ひ導いて、我が眞の教に本つきよ
 らしめて、神様の御恩をかうむるやうにさせるこ
 とをば、我が身が受けた、神様の御恩に對して、御返
 禮を申し上げる所の道と申すことである。

(第八章の行義)

神恩には、二つの種類がある。其の第一は、御守護、即
 ち、攝理の御恩であつて、其の第二は、靈救の御恩で
 ある。凡そ、天地間に存在する、生きとし生けるもの、
 一人として、其の身體は、神様の御守護に依らない

ものはない。其の靈魂は、又、神様の御與へにならな
 いものはないのであるから、一切の人類は、神様の
 攝理の御恩を蒙らないものはないと云ふ事が知
 られよう。然し、靈救の御恩に至つては、又、別で、これ
 は自分の罪惡と、世界の禍害とを、自から覺つて、或
 は修徳、或は被除によつて、天命を奉じ、八つの埃を
 拂つて、徳性の光を出し、神人合一の境に至るもの
 であつて、始めて、この靈救を享ける事が出来るの
 である。若し、吾々が、この靈救を享けなかつたなら
 ば、縦しんば、吾々が、現に、神恩の世界に住ひ、天から
 授けられた徳性を有つて居るにもせよ、吾々の心
 や身体から、禍害と、罪惡と、肉體、又は精神の樂みを、完
 世でも、あの世でも、共に、肉體、又は精神の樂みを、完

全に保ち、窮りなく、限りなき幸福を獲る事は、出來
 ない。昔では、この靈救の御恩を稱して、神の恩賴を
 被ること云うた。本章に云ふ所の神恩とは、即ち、靈救
 の御恩を意味して、居るのである。
 それゆゑ、吾々が、靈救の御恩を迎へむと欲すれば、
 本教に歸依して、天理を信奉すべきは、言ふ迄もな
 いが、更に進んで、確信、改悔、善功、謝恩と云ふ如き要
 件を實行せなければならぬ。さて、第一の確信と云
 ふのは、天理大神の靈光を、我が心に充して、八つの
 埃を拂ひ去り、天賦の徳を明かにする事である。第
 二の改悔と云ふのは、常平生に、我が心を反つて見
 て、罪惡があつたならば、其の罪惡を、心から懺悔す
 ることである。第三の善功と云ふのは、人を愛し、國

を愛し、教を愛するが爲、自分を犠牲に供することである。而して、第四の謝恩と云ふのが、最も大切なもので、これは、分秒の間も、神様の御恩の廣大無邊なる事を忘れず、少しも休まない至誠の信仰と熱誠を以つて、大神様に對し、本教に對し、教祖に對して、同じく、本教を信じて居る者も、心を同じくして、互に助け合ひ、眞理を擴める爲に、力を盡し、未だ信じて居ないものに對しては、誠の道を信ずるやう教へ導き、本教に歸依させて共に、神様の御恩に浴せしめ、國を愛し、人を愛し、教を愛する所の目的を貫く事なのである。我々教徒たるものが、神様の御恩を報謝し奉る道は、以上四つの條件を外にしては、別にないのである。

第九 神樂章

神樂は、古くは、かみあそびと申し、大昔から傳はつて居る、神事であつて、歌ひ舞うて、神様の御心を慰め奉り、祈禱の意を致す儀式である。さて、本教にても、教祖の御創めなされた神樂の儀式があるが、此の章にては、神樂といふものゝ起る理由及び神樂の効用を述べられたので、之を神樂章とは申されたのである。

神樂は、遠く、神代に起て、今、尙、世に傳ふる所なり。各人、造化、成育の恩の、廣大無限なるに、思ひ到らば、誰か、欣喜、拊舞せざらんや。蓋し、情中に動て、言に形は、る。之を言ふて、足らず。故に、嗟嘆す。之を嗟嘆して、足

らず故に、詠歌す之を詠歌して足らず。故に、手の舞ひ足の踏む所を知らざるの理也。

神樂は、遠く神代に起りて、今尙世に傳ふる所なりとある。遠くとは、時の遙かなるをいふ。神代は、カミヨと訓みて、大昔神々様があらはれたまうて、此の國を創められたる時をいふのである。そこで、此の句は、神樂と申す儀式は、今よりは、遙かに遠い、神代の大昔に起り始まつて、今でも尙むかしのまゝに世の中に傳へて行ひつゝある所のものである。こいふ意である。さて、神樂は、天照大御神の、天石窟に御禮の備はるに至るや、遂に、神事の一つと爲り、世々朝廷の御儀式となつて、今に宮中に存して居るの

である。又、俗間には、里神樂といふものがある。是等も、神樂の變り遷つて、傳はつて居るのである。そこで、此一句は、神樂は、いつ始まつたものであるかといふ、その起源を述べられたのである。各人、造化、成育の恩の廣大無限なるに思ひ到らば、ごある、各人ごは、オノオノヒトご訓みて、人々誰にても、ごいふ意思、ひ到るごは、考へ及ぶごいふに同じである。そこで、此の句は、人々、誰にても、神様が、萬物を造り化らせ成し育て給ひて、我等人間も、神様の御蔭で、此の世に生まれ、神様の定め給うたる君を戴き、神様の作らせられたる國土に住み、萬物を取り用ゐて、生存し發達して行くことを得る、その御恩の廣く、大きく、限りも無いごいふことに考

へ及んだならばこいふ意である。
 誰か、欣喜抃舞せざらんやとある、欣喜は、ヨロコビ
 ヨロコブと訓む字、抃舞は、テウナマフと訓みて、う
 れしさ餘つて、手をたゞいてをざるこいふ意。そこ
 で、この句は、神様の御恩の廣大無限なる事に思ひ
 及んだならば、誰か、よろこびよろこんで、手を打つ
 て舞はずに居られようぞ。誰でも、嬉しさ餘つて、手
 をたゞいてをざるであらうこいふ意になるので
 ある。さて、各人「こいふより、こゝまでは、神樂こいふ
 ものゝ起り始まる理由を述べられたので、次には、
 その理由を、委しく説かれたのである。
 蓋し、情中に動て、言に形はるこある、情は、嬉しい
 ことか、悲しいことか、腹立たしいことか、楽しいことか、可愛

いことか、悪いことか、外の物にふれて感じ動くことろ
 のことであるが、こゝでは、おもに、嬉しく、喜ばしい
 ことか、こゝろをいふのである。中こは、形にあらは
 れぬ心の中をいふ。そこで、此の句は、大方推量して
 見るに、嬉しく、喜ばしいこいふことろが、目に見え
 ぬ心の中に動き起つてくるこ、その、よろこびのこ
 ろろが、自然に、聲こなつて、口より出で、言葉の上に
 形れてくるこいふ意である。
 之を言うて足らず。故に嗟嘆すこある、嗟嘆の嗟は
 なげいて、あゝと發する聲をいひ、嘆は、ナゲクと訓
 む字である。そこで、此の句は、嬉しく、喜ばしいこい
 ふ感情を、聲に出して言うても、なほ、その感情が、言
 ひつくせずして、餘りがある。それ故に、又、あゝと、聲

を發してなげくといふ意である。
 之を嗟嘆して足らず。故に詠歌すこある、詠歌の詠
 は、聲を、永くひくこと、歌は、ウタフこと訓む字で、歌に
 うたふこと。そこで、此の句は、その感情を、あつこと、聲
 を出してなげきても、十分に、感情をあらはすこと
 が出來ずして、不足に思はれる。それ故に、聲を永く
 ひいて、歌にうたふやうになるといふ意である。
 之を詠歌して足らず。故に、手の舞ひ、足の踏む所を
 知らざるの理也とある、手の舞ひとは、手が自然と
 舞ひだすといふこと、足の踏むとは、足が自然と、拍
 子をとつてをざるといふ事。そこで、此の句は、その
 あり餘る感情を、聲を、永くひいて、歌にうたひだし
 ても、なほ、不足である。それ故に、手は自然に舞ひだ

し、足は、自然に拍子をとつてをざりだしても、自分
 では、さうなるのが分らない。即ち、しらずしらず舞
 ひをざる事になるといふ道理であるこの意にな
 るのである。さて、蓋しといふ所から、こゝまでは、神
 樂の起る理由を、委しく説かれたので、神様の御恩
 を、嬉しく感じて、喜ぶころは、言葉に出で、やがて、
 なげきの聲となり、なほ、進んで、歌となり、舞となる
 といふは、自然の道理で、情の極まる處至誠が發し
 て、此の神樂となつたものであるといふ理をのべ
 られたのである。
 (括意) 神樂と申す儀式は、今よりは、遙かに遠い神
 代の、大昔に起り始まつて、今でも、なほ、昔のまゝに、
 世の中に傳へて行ひつゝある所のものである。さ

て、此の神樂は、いかなるわけで起つたかといふに、人々、誰にても、神様が、萬物を造り化らせ、成し育て給ひ、我等人間が、かやうに、樂しく、世に生存して、發達をこげてゆくといふ、その御恩の、廣く大きく、限りも無いといふことに考へ及だならば、誰か、欣び喜んで、手をうつて舞はずに居られようぞ。誰でも、嬉しさがあまつて、手をたゞいてをざるであらう。是が、神樂の起るわけである。おほかた、推量するに、嬉しく、喜ばしいといふ感情が、心の中に起つてくる。その喜びのこゝろが、自然に、聲となつて、言葉の上にあらはれるやうになる。その、嬉しく、喜ばしいといふこゝろを、聲に出して言うても、なほ、その感情が言ひ盡せずして、餘りがある。それ故に、又、あ

ゝと、聲を發してなげく事となる。かやうに、あゝと、聲を發してなげいても、なほ、十分に、感情をあらはすことが出来ずして、不足に思はれる。それ故に、聲を、永くひいて、歌にうたふやうになる。その、あり餘る情を、永くひいて、歌にうたひだしても、なほ不足である。それ故に、手は、自然に舞ひだし、足は、自然に、拍子をこつてをどりだしても、自分では、さうなるのが分らない。即ち、しらずしらず、舞ひをざる事になる。といふ道理である。

是を以て更に、神樂歌を製り、神樂勤を行はしむ。素より、神慮を慰め、神恩を謝するの道に外ならずと雖ども、また、信心修行の間に、神人一和して、幸福を

生ぜむことを期す。

是を以て、更に神樂歌を製り、神樂勤を行はしむこ
ある、是を以てこは、前に、神恩を喜ぶあまりに、自然
に、之を歌にうたひ、舞にまふやうになるご申され
たる意を承けて、かやうな譯であるからして、こい
ふ意である。更にこは、別段に改めてなごいふ意で
ある。そこで、此の句は、かやうな譯であるからして、
我が天理教の教祖は、神恩を喜び給ふあまりに、改
めて、神樂歌をお製りなされ、舞をも製られて、信徒
のものに、此の歌をうたひ、此の舞をまうて、神樂勤
を行はしめられたごいふ意である。
素より、神慮を慰め、神恩を謝するの道に外ならず
ご雖ごもごある、神慮ごは、神様の御こゝろご申す

ここで、此の句は、我が教祖が、神樂勤を行はせられ
たるは、もごより、此の神樂勤を以て、神様の御こゝ
ろをおなぐさめ申し、神様の御恩のありがたさを、
御禮を申し上ぐる道の外では、ないけれども、ごい
ふ意である。神樂勤を行ふのは、神恩を喜ぶあまり
に出づるので、即ち、至誠のあふれたるもの故に、神
様も、亦喜んで、之を御受け遊ばさるゝので、即ち、神
慮を慰め奉ることとなるのである。又、神恩を喜ぶ
あまりに、神樂勤を行つて、神慮を慰め奉るごいふ
は、即ち、神恩を謝し奉る第一の道である。故に、かく
申されたのである。
また、信心修行の間に、神人一和して、幸福を生ぜむ
ことを期すごある、信心ごは、眞心を以て、神様を信

仰するこそ、修行とは、オコナヒオナサムと訓みて、
 祓除修徳して、天賦の本性に歸ることをつとむる
 をいふのであるが、こゝでは、神樂勤を行ふことに
 なるのである。神樂勤を行ふは、やはり、信心修行を
 するのである。一和とは感通して、一つになりて、和
 ぎ樂むといふこと。そこで此の句は、教祖が、神樂勤
 を行はせられる趣意は、前に示されたやうなもの
 であるけれども、その外に、また、神樂勤を行つて、眞
 心にて、神様を信仰し、己の徳を明かにするやうに
 修行する間に、神様の御よろこびの御心さ、人間の
 至誠さが感通して、一つになり、和ぎ樂んで、神様の
 御恵が下つて、幸福の出で來らんことをかならず
 さねがひもごめられたのであるといふ意である。

(括意) かやうな譯であるからして、我が天理教の
 教祖は、神樂歌を御つくりなされ、舞をも製られて、
 信徒のものに、此の歌をうたひ、此の舞をまうて、神
 樂勤を行はしめられた。これは、もごより、此の神樂
 勤を以て、神様の御こゝろを御なくさめ申し、神様
 の御恩のありがたさを、御禮を申し上ぐる道の外
 ではないけれども、その外に、また、此の神樂勤を行
 うて眞心にて、神様を信仰し、己の徳を明かにする
 やうに修行する間に、神様の御よろこびの御心さ、
 人間の至誠さが感通して、一つになり、和ぎ樂んで、
 神様の御恵が下つて、幸福の出で來らんことを、か
 ならずさねがひもごめられたのである。

(第九章の行義)

御神樂は、皇祖天照大神が、天の岩屋に閉ち居り給ひし時、天鈿女命が、手に茅纏の稍を持ち、天の日蔭を、手纏にかけ、天の眞拆を、髪さし、歌を唱ひ、舞を舞ひ給ひ、天の兒屋根命は、詔詞を奏上して、天照大神の大御心を和げ奉り、招き出し奉つられたことは、國史上に見えたる古き例であつて、今日に至つても、矢張り神事儀式の一つとなつて傳はつて居る。これ、本章に「神樂は、遠く、神代に起つて、今、尙世に傳ふる所也」とある所以である。

抑も、樂と云ふものは、内心の至誠が、表に現はれたもので、神と人との和合である。人類の性質として、感情が極まつて、聲を發すれば、歌となり、又た、感情が極まつて、これが、身體の上に發すれば、舞となる。

この歌と舞とを合奏するものが、即ち樂である。而して、神樂と云ふものは、神の御徳を讚美し、神の御恩を感謝するものであつて、神と人との和合が、其中に行はれる。それゆゑ、神樂は、禮典儀式の中で、最も大切な、最も尊い、最も神秘不思議なものである。我が教祖が、御神樂歌を製り給うたのは、全部十二段百餘首であつて、本教々理の大意は、略ぼ斯の中に備はつて居るが、其の言葉は、ごく手近であつて、其の意味は、甚だ深い。我等天理教徒は、時に應じ、折に觸れて、これを奉奏するを以つて、神恩を謝し、行を修むる要として居る。造化成育の御恩の廣大にして、限りもない事を思うて、欣び喜んで舞ひ踊るのは、神恩を謝するのである。此神樂勤めは、即ち

信心の形に發はれたるものにて宗教上の修行の
 一つである而して此修行によりて神の御心を慰
 め奉るを得ば神は自ら幸福を人に降して更に人
 心の慰安を生み出すを得るが故に教祖は之を陽
 氣勤めとも稱せられたのである。
 つゞまる所本教の神樂勤は固より神の御心を慰
 め神の御恩を謝し奉る外はないがなほ其の中に
 祈禱の意味をも含んで居るのでかりそめにも御
 神樂歌を拜誦するものは本教々々の要を知るこ
 とが出来更にこれを奉奏すれば神と人が一致
 和合する靈しき境に至る事が出来る世の中には
 屢々本教の神樂勤は卑しいものと思つたり或は
 未開時代から傳つて來た習慣であつてこれが爲

に、宗教の神聖を害するやうな事はありはせぬか
 と、窃に考へる人がないでもない。然しこれは歌も
 舞も共に同じ一つの感情から出たものであつて
 舞は、歌のなほ一足前へ進んだものであると云ふ
 事や、本教の神樂勤の精神と云ふものは、身體で
 ふ事と、口で言ふ事と、心で思ふ事との三つの業が
 相應じて、内と外とに隔たりがなく、言ふ事と、行
 事とが一致するのが、極めて大切であること云ふ意
 味を示した、一筋の眞實心から、天に歡び、地に喜
 び、神と人が一致和合し、彼と此とが相應する
 不思議な理義が、實に、この御神樂勤めの中に含
 つて居ること云ふ事なごを知らないのが原因なの
 である。本教に於いて行はるる神樂勤は、以上の理

由によつて見ても、實に大切なるもので、その精神の尊いものであるといふところが理解せられるのである。

第十 安心章

安心とは、コ、ロサヤスンズと訓みて、憂へ哀み、恨み怒り、恐れ驚くといふやうな累がなく、心がしづまりやすんじて、何の苦勞も、心配もなきことにて、すべての宗教は、みな此の安心を得ることをつこむるのである。この教典においても、第一章よりして、段々、條目をあげて述べられたが、つまるところは、この安心を得しむるにあるので、こゝに、此の章を置いて、教典の結末とし、本教の終局の目的を示さ

れたのである。

生死二なし。貧富順逆も、亦命のみ。要は、止だ、人間の本分を盡し、天神の命を待つに在り。苟も、天理を明にし、人道を踏み、仰て、天に恥ぢず、俯して、地に愧ぢずむば、何の處にか、懊惱煩悶あらむや。

生死二なしとは、人間が、此の世に生まれていき、居るのも、此の世を去つて死ぬといふのも、是は、たゞ、肉體の上の事を申すので、靈魂は、常に、滅するところがないものであるによつて、生といひ、死といふも、決して、二つはないものであるこの意である。かく、生死は、も、二つのものではなくして、靈魂は、不滅であるが故に、人間は、たゞ、肉體が、此の世に在る

間の事ばかりについて、思案をせずして、將來永遠
 にわたつて、大いに、安心の道を求めねばならぬの
 である。
 貧富順逆も、亦命のみこある、貧は、マツシご訓みて、
 貧乏なること、富は、トミご訓みて、身代のよきこと、
 順逆の順は、シメガフご訓みて、物事の順序よく、調
 子よく運ぶことで、爲ること、成すことが、皆心のま
 りに遂げらるるを云ひ、逆は、サカフご訓みて、順
 の反對で、爲ること、成すこと、皆思ふやうにならず、
 くひちがふをいふのである。命ごは、天命ご申し、
 神様の御指圖ごいふこと、のみごは、それに限つて
 居て、外の事ではないごいふ意である。そこで、此の
 句は、人間が、此の世に在つて、あるひは、貧しく、或は、

富み、或は、順の境に居て、する事なす事、調子よく、心
 のまゝになり、或は、その反對に、逆の境に立ちて、す
 る事なす事、皆くひちがつて、思ふまゝにならぬご
 いふのも、畢竟は、我が生前の徳の善悪により、神様
 の御指圖で、かくあるのに限つて居て、決して、外の
 わけではないごいふ意である。今生の貧富順逆は、
 前世の徳の善悪によつて、神様の命じ給うた所で
 あるごするごときは、なほ、將來に、富貴幸福を得よう
 ごするならば、つごめて、善徳をつまねばならぬ。然
 するごときは、たごひ、此の世においての富貴幸福を
 得られぬ事があつても、來世において、必ず、御め
 ぐみにあづかるごことが出来るのである。
 要は、止だ、人間の本分を盡し、天神の命を待つに在

りごある、本分とは、本来の職分といふことで、神様より仰せつけられたる、本来のつこめ、即ち、敬神の章以下にのべられたる、人のつこめ、行ふべき事をいふのである。そこで、此の句は、前の意を承けて、然らば、人間は、どうすればよいかと云ふに、そのすべき事は、種々あらうけれども、要とする所は、ただ、人間の、本来の職分、即ち、神様から仰せつけられたる、本来のつこめを、残る所なく行ひつくして、神様の御命令、即ち、御差圖を待つまでの事である。こいふ意である。貧富順逆にかゝはらず、たゞ、己の本分を盡し、善徳をつまんことを心がけたならば、神様は、必ず、之がむくいとして、貧賤のものは、富貴ならしめ給ふらしめ、富貴のものは、ますます、富貴ならしめ給ふ

べきである。

苟も、天理を明にし、人道を踏みごある、苟もごは、かりそめにもごいふこと、天理ごは、上に、度々申したる如く、神様の定め給うた、天地間の、眞の理で、神様が、天地萬物を、天地萬物たらしめ給ふ理を申し、人道ごは、人のふみ行ふべき道で、是も、ごは、神様が、人間を、人間たらしめ給ふために立てられたる道で、つまり、天理に外ならぬのである。そこで、此の句は、人たるものが、かりそめにも、神様の定め給うた、天地間の、眞の理を、心には、つきりごさごり、神様が、人間を、人間たらしめ給ふために立てられたる人の道を、踏み行ひてごいふ意である。仰で、天に恥ぢず、俯して、地に愧ぢずむばごある、耻

ちこは、心にやましこ、はちおもふこで、此の句は、
 前にのべたる如く、人のふむべき道をふみ行うて、
 天を仰ぎ見ても、天にまします神様に對して、我が
 心に、やましこはちおもふこなく、又、地を俯して
 見ても、地にまします神様に對して、はづかしと思
 ふこが無かつたならば、こいふ意である。我が身
 が、もし、不正の行をするときは、たごひ、人には知
 らずとも、天地の神様は、御承知であらせられるか
 らして、神様に對しては、實に心やましく、はづかし
 いであらう。之に反して、我が行ふ所は、悉く、道にか
 なつて居たならば、たごひ、人は知らずとも、天地の
 神様は、またよく、之を知ろしめして御座るによつ
 て、ねても、おきて、心に、やましく、はづかしと思ふ

所はないであらう。之をば、仰で、天に恥ぢず、俯して、
 地に愧ぢず、こは申されたのである。
 何の處にか、懊惱煩悶あらむや、こある、懊惱は、ナヤ
 ミ、ナヤムと訓みて、心に、苦痛を感じるこ、煩悶の
 煩は、ワヅラフと訓みて、心に思ひわづらふこ、悶
 は、モダユと訓みて、胸につかへて憂へ結ばれるこ
 だ。そこで、此の句は、人道をふみ行ひ、天地の神に對
 して、はづかしと思ふ所がなかつたならば、人間の
 心の中に、何處に、なやみ、わづらひ、もだゆる事があ
 らうぞ。決してなやみ、わづらひ、もだゆるこいふ事
 は、ないこいふ意である。初めから、こゝまでは、安心
 といふこを説かれたので、懊惱煩悶のないやう
 になつたこいふのは、即ち、安心の境に至つたので

ある。
 (括意) 人間が此の世に生まれていき居るのも、此の世を去つて死ぬといふのも、此はたゞ肉體の上のここを申すので、靈魂は常に滅することのないものであるから、生といひ、死といふも、決して二つはない。人間が此の世に在つてあるひは貧しく、或は富み、或は順の境にあつて、する事なす事、調子よく、心のまゝになり、或はその反對に、逆の境に立つて、する事なす事、皆くひちがつて、思ふまゝにならぬといふのも、つまりは、我が生前の徳の善惡によつて、神様の御差圖で、かくあるのに限つて居て、決して、外のわけでは無いのである。然らば、人間は、どうすればよいかといふに、そのすべき事は、種々

あらうけれども、要とする所は、たゞ、人間の本来の職分、即ち、神様から仰せつかつた、本来のつごめを、残る所なく、行ひつくして、神様の御命令、即ち、御差圖を待つまでの事である。そこで、人たるものが、かりそめにも、神様の定め給うた、天地間の、眞の理を、心には、つきりごさごり、神様が、人間を、人間たらしめ給ふために立てられたる、人の道を、踏み行つて、天を仰ぎ見ても、天にまします神様に對して、わが心に、やましご、はちおもふことなく、地を俯して見ても、地にまします神様に對して、はづかしご思ふことが無かつたならば、心の中に、ごこに、わづらひなやみも、だゆるごいふことがあらうぞ。決して、わづらひなやみも、だゆるごいふことは、無く、極

めて安心である。

今、夫れ神を敬するものは、皇を尊び、皇を尊ぶものは、國を愛し、國を愛するものは、人倫を明にし、人倫を明にするものは、徳を脩め、徳を脩むるものは、禍害を祓ふ。禍害を祓ふものは、天理の神教に信賴し、天理の神教に信賴するものは、神の恩賴を被むることを得、神樂によつて、神人和諧し、慶福を生ずることを得、苟も斯の如くにして、身心即ち安し。十章の教憲、即ち、一のみ。

今、夫れ神を敬するものは、皇を尊びとある、夫れは、下にのべられたることを指したる語で、此の句は、今、こゝに、教祖の立てられたる教理に基いて、神

様の、造化、成育の靈徳を知りて、之を尊び敬ひ奉るものがあるときは、その人は、必ず、その神様が立て定め給うて、神様の御名代として、その御命令にて、我等臣民を御統治遊ばす所の皇上、即ち、天皇陛下を尊び、敬ひ奉るこゝいふ意になるのである。皇を尊ぶものは、國を愛し、皇を尊ぶものは、皇陛下、即ち、天皇陛下を尊び、敬ひ奉るものは、國を愛し、皇陛下、即ち、天皇陛下を尊び、敬ひ奉るものは、必ず、また、神様の御作りなされて、皇上をして御治めしめ遊ばさるゝ所の國を、大切に愛護して、神様と、天皇陛下との思召に従うて、その國の進歩發達して、榮ゆくやうに、心掛けるこゝいふ意である。國を愛するものは、人倫を明にし、此の國を、大切に愛護して、榮ゆくやうに、心

その國の中に住んで居る人の、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友等のたぐひがあるに従つて、その間に行はるゝ、人倫の常の道を、明かにささつて、之をよく、その身に行ふといふ意である。國は多くの人の集まり合ふたものであるによつて、人ご人ごの倫の異なる間に、道が行はれなければ、秩序が立たずして、その國の榮はゆくといふことは出来ぬものである。それは、故に、國を愛して、その榮はゆかんことを思ふものは、必ず、人倫の道を明かにして、之を行はんことを期するのである。

人倫を明にするものは、徳を修め、人は、人倫の道を明かにして、之を、身に行ふものは、必ず、その道の出で來る本であつて、神様より、人々に賦り與へられ

たる所の徳を脩めつくろつて、神様より賜はりたるまゝの、本來の、明かなるすがたに立ちかへらうとするといふ意である。

徳を修むるものは、禍害を祓ふことは、神様より賦り與へられたる徳を脩めつくろつて、本來の、明かなすがたに爲ようとするものは、その徳の光をおほひけがす所の罪惡汚穢の、人の禍害となるものを祓ひ除くことであるといふ意である。これ、即ち、八埃祓除のことで、本教の信徒たるものが、第一に、修行せねばならぬ、最も重いつごめである。それ故に、此の脩行がつむべきは、その人の徳は、明かになり、人倫の道は、缺くる所なく行はれ、愛國の義も立ち、尊皇の誠も盡され、而して、神様を敬ふといふ、本來

の意にかなふやうになるのである。また一方には、
 是から次々にのべてあるごほり、八埃を祓ふもの
 は、此の御教にすがつて、神様の境に至るごもて
 きるやうになり、神様の御恩頼を蒙り、神人一和し
 て、幸福を生じ、つひに、最終の目的たる安心を得る
 に至るのである。
 禍害を祓ふものは、天理の神教に信頼しごある、信
 頼ごは、マコト、タヨルご訓みて、信仰しておすがり
 申すごいふ意である。そこで、此の句は、徳の光をお
 ほひかくす罪穢の、人の禍害ごなるものを祓ひの
 ぞくものは、此の天地間の、眞の理である。神の御教
 を信仰して、之におすがり申して、つまりは、神様の
 境に到るごも出来るやうになるごいふ意であ

る。
 天理の神教に信頼するものは、神の恩頼を被るご
 こそ得ごは、此天地間の、眞の理である。神の御教を
 信仰して、之におすがり申して、神様の境にまで至
 るごいふものは、必ず、神様の恩頼、即ち御恵愛を被
 るごご出来るごいふ意である。
 神樂によつて、神人和諧し、慶福を生ずるごを得
 るごは、神樂は、もご、神様の御恩の洪大なるを喜ぶあ
 まりに出来たので、此の神樂を行ふごきは、神様も、
 人間も、共に樂み、共に喜んで、互に和ぎ諧ひて、ます
 く、神様の御めぐみを受けて、よろこび幸福を生
 ずるごご出来るごいふ意である。
 苟も、斯の如くにして身心、即ち安しごは、人たるも

の、かりそめにも、前にのべたるが如く、敬神尊皇以下、九章の中に説き示したる事を行つて、人たるもの、本分を盡すときは、やがて、疾病もなく、災害もなくして、其の身は無事になやみ、わづらひも、だゆるさ、いふこともなくして、その心は安く、樂しくして、いはゆる安心を得ることが出来るさ、いふ意である。

十章の教憲、即ち一のみさある、一のみさは、たつた一つで、二つはないさ、いふ意で、此の句は、上の敬神の章より始めて、安心の章に至るまで、十章として、此の教典に掲げて、信徒の遵ひ守るべきものこそせられたる教ののりは、前にのべたる所を以て見れば、やがて、たつた一つとなつてしまふ。即ち安心さ

いふことに歸着してしまふさ、いふ意である。

(括意) 今、ここに、教祖の立てられたる教理にも、こづいて、神様の造化、成育の靈徳を知りて、之を尊び敬ひまつるものがあるさ、きは、その人は、必ず、神様が立て給うて、神様の御名代として、その御命令にて、我等臣民を御統治遊ばす所の皇上、即ち、天皇陛下を尊び敬ひ奉り、皇上を尊び敬ひまつるものは、必ず、又、神様の御作りなされて、皇上をして、御治めしめ遊ばさるる所の國を、大切に愛護して、神様と天皇陛下との思召に従うて、その國の進歩發達して、榮ゆくやうに、心がけ、又、此の國を、大切に愛護して、榮ゆくやうに、心がくるものは、その國の中に、住んで居る人の、父子、夫婦、兄弟、朋友等のた

くひのあるに、従つて、その間に行はるゝ、人倫の常
 の道を明かにさこつて、之をよく、その身に行ひ、又、
 人倫の道を明かにして、之を身に行ふものは、必ず、
 その道の出で来る本であつて、神様から、人々に、
 ばり與へられたる所の徳を脩めつくろうて、神様
 より賜はりたるまゝの、本來の、明かなるすがたに、
 立ち歸らうとし、又、神様より賦り與へられたる徳
 を脩めつくろうて、本來の、明かなるすがたにし、
 うとする者は、その徳の光をおほひかくす所の、罪
 悪汚穢の、人の禍害となるものを被ひ除き、又、徳の
 光をおほひかくす罪穢の、人の禍害となるものを
 被ひのぞくものは、此の、天地間の、眞の理である、神
 の御教を信仰して、之におすがり申して、つまりは、

神様の境に到ることもできるやうになり、また、此
 の、天地間の、眞の理である、神の御教を信仰して、之
 におすがり申して、神様の境にまで至るこいふも
 のは、必ず、神様の恩頼、即ち御恵愛を被るこが出
 来る。又、神様は、も、神様の御恩の、洪大なるを喜ぶ
 あまりに、出来たので、此の神樂を行ふときは、神様
 も、人間も、共に樂み、共に喜んで、互に和ぎ諧ひて、ま
 す、神様の御めぐみを受けて、よろこび幸福を
 生ずるこが出来、人たるもの、かりそめにも、前
 にのへたるが如く、敬神、尊皇、以下九章の中に、説き
 示したる事を行つて、人たるもの、本分を盡すこ
 きは、やがて、疾病もなく、災害もなくして、その身は、
 無事に、なやみ、わづらひ、もだゆるこいふこもな

く、その心は安く樂しくして、いはゆる安心を得る
 ここか出来るのである。そこで、上の敬神の章より
 始めて、安心の章に至るまで、十章として、此の教典
 に掲げて、信徒の遵ひ守るべきものごしたる教の
 のりは、前にのべたる所を以てみれば、やがて、たつ
 た一つごなつて、安心ごいふごに歸着してしま
 ふのである。

庶幾くは、天理の玄妙に參じ、神魂不滅の理を窮め、
 天命に安むぜむことを。

庶幾くは、天理の玄妙に參じごある、庶幾くはの、庶
 幾の字は何れも、コヒネガフご訓みて、願ひのぞむ
 意の語で、文の終りの安むぜむごをいふまで
 かゝるのである。玄妙はホクフカクタヘナリご訓

みて、極めて奥深くして、微妙なる道理をいふ。參じ
 ごは、まじはるごいふごで、そこに到り届いて、よ
 く會得すること。そこで、此の句は、こひねがひのぞ
 むごには、我が教に入り立てる人々は、神の立て
 給うた、天地間の、眞の理の、極めておくふかくして、
 微妙なる所に到り届いて、よく、これを會得してご
 いふ意である。さて、前には、天理を明にし、人道を踏
 み云々ごあるを、ごには、天理の玄妙に參じご申
 されたのは、つまり同じごであるが、奥ふかくし
 て、微妙なる天理を會得して、之を身に行ふは、勿論
 ごくに、心を安定して、疑ひ惑ふごなかるべき意
 を示されたので、たい、前よりは、一層深き意味をの
 べて、文のむすびをつけられたのである。

神魂不滅の理を窮めこは、神様より賜はりたるたましひご申すものは、もご神様の御分靈であるからして、たごひ、肉體は滅するごも、神様の無窮にましますが如く、靈魂は、無窮にして、決して滅びてなくなるものでは無いごいふ道理を窮めしりてごいふ意である。さて此の句は、本章の初めに「生死二なし。貧富順逆も、亦命のみごある意を承けて、之を結ばれたのである。生死の二つなき道理を悟り、貧富順逆を、天命ご知りて、天を恨みず、人を咎めずして、たご、己れの本分を盡さんごの覺悟をするは、たご、靈魂の不滅なるごを信するからである。それ故にこごには、その眼目たる所の神魂不滅の理を窮めごいふごを述べて、前の意を遺憾なく完結

せられたのである。天命に安むぜむごをこは、神様の御命令の儘に心を安んじ定めて居らんごをこひねがひ望むごであるごいふ意である。この句は、前に「何の處にか、懊惱煩悶あらむや」ごあり、又「荷も、斯の如くにして、身心即ち安し」ごある意を承けて、之を結ばれたのである。さて、こごの「庶幾くは」ごあるより以下の三句は、此の安心の章の全體をこりつかねたる結尾であつて、其中にて、最後の「天命に安むぜむごをこいふは、また、前の二句の意をこりつかねて居て、結尾の中の結尾である。さてまた、此の安心の章は、教典十章の意味の歸着する所で、全編の結尾であるからして、安心の章の結尾即ち、前の三句は、

亦全編の結尾で、教典全體の意義は、實に此の三句
につかねられ、また最後の一句に歸着してしまふ
のである。こゝらは、最も注意して味ひ見るべきで
ある。

(括意) こひねがひのぞむことには、我が教に入り
立てる人々は、神の立て給へる天地間の眞の理の
極めておくふかくして、微妙なる所に到り届いて、
よく之を會得して、神より賜はりたる靈魂さいふ
ものは、もご神の御分靈であるからして、たごひ肉
體は滅するごも、神様の無窮にましますが如く、靈
魂は無窮にして、決して滅びて無くなるものでは
無いといふ道理を窮め知りて、神様の御命令のま
ゝに心を安んじ定めて居らんことをこひねがひ

のぞむことである。

(第十章の行義)

教祖は、人間が死んで、又生れて來る様を、物に譬へ
て、それは、恰度古い衣を脱ぎ捨て、新らしい着物
を着るやうなものであるご誨へ給うた。これによ
つても、肉體には、生死があつても、靈魂には、生死の
ないご云ふ事が解る。靈魂に、生死がないのは、元々、
神から、直ちに分れた、燃ゆる滅びざる靈體であ
るからなので、身體に、生死のあるのは、物質が寄集
まつて出來上つたものであるからである。人類が、
個人々々として、亦全體として、生や死のある
のは、これは、實は、人類が、年々歳々、甘露臺を建設せ

むごして、發達するが爲には、缺くべからざる、必要な條件である。若し、人間に、生死がなかつたならば、内面の生活と、外面の境遇とが、互に一致する事が出来なから、人類が、其の本來の目的たる向上進歩を、實際に現す事も、従つて出来なくなる。本章に「生死二なし」と謂はれてある意義は、全く、かう云ふ譯なのである。

人間の境遇には、貧しいものもあれば、富んだものもあるし、都合のよいものもあれば、都合の悪いものもある。これは、前世の因縁が、現在の結果となつて現れて来たものであつて、現在に於いて、貧しいものなら、未來に於いて富まうとか、現在、都合の悪いものなら、將來都合をよくしようとか、望むことが出

来るが、既に過ぎ去つて了つたものは、最早如何にもする事が出来ない。かくて、前世の因縁は、今世へ持ち越し、今世の因縁は、矢張り、來世へ持ち越すこと云ふ風に、環の端なきが如く、循環して盡きないものである。それ故、現在世の中に處して行くには、天を怨みず、人を尤めず、精神を安らかにして、一生懸命に進み進んで、悪い因縁を去つて、悪い果報を避け、善い因縁を作つて、善い果報を得る事に努めなければならぬ。

かう云ふ風にするには、教祖が、天の神様より啓き傳へられ給うた教を信じて、天理を明にし、明倫脩徳を以つて、人道を踐み、神の御聲を、良心に聞き、人に睹ねない、聞ねない所にあつても、自分獨を慎み、

天を仰いで耻ぢず、地に俯して愧づることなく、八
 つの埃から起つて來る惱みや悶々を擺き脱れて、
 身体も精神も共に、これを天の御心に御任せ申す
 べきである。本章に、貧富順逆も、亦命のみさあるの
 は、此の邊の意味である。
 抑も、物には、本末末ごがあり、事には、終りと始めご
 がある。而して、吾々人間にこつて、第一に爲さねば
 ならぬ事は、神様を敬ふのが、最も根本で、又た、最も
 始めなのである。既に、神を敬ふものは、天皇陛下を
 尊ばなければならぬ。天皇陛下を尊ぶものは、國を
 愛せなければならぬ。國を愛するものは、人倫の道
 を明かにせなければならぬ。人倫を明かにするも
 のは、其の本源たる徳を脩めなければならぬ。徳を

修めるには、神の恩頼に御頼り申して、罪惡禍害を
 祓はなければならぬ。罪惡禍害を祓はんごするに
 は、教祖の天啓の教に信頼して、洪大無邊なる神の
 御恩を報謝しなければならぬ。教祖の天啓の御教
 に信頼して、洪大無邊なる神の御恩を報謝するも
 のは、御神樂勤を奉行せなければならぬ。かくの如
 くにして、本教々徒の安心立命ご云ふものが、始て
 成立する。それであるから、本教々徒たるものは、我
 が教祖の教に基き、常に、至誠息まざる心を以つて、
 神様の御守護を歡び、我が天皇陛下は、天より御定
 めになつた眞正の君主に坐します事を信じて、誠
 忠を盡し、又、この國土は、天つ神様が御經營りなさ
 れ、天皇陛下の統へ治め給ふ所であるから、これを

愛し護り、彙倫の道を即かにして、人の人たる道を行ひ、徳を脩め、罪惡を被ひ、神の御教に信賴して、他の念を起さず、神の恩寵を被りて、神と人とが一致和合する靈境に到るやうに心懸け、そして、神樂勤を以つて、神様の御意を慰め、神様の御恩を謝し奉つて、各人に幸福を與へらるゝ道とし、天から授かつた所の本分を盡して、たゞ、天の命令を待ち、精神の安らかにして、結構なことが限りもない、この生命を樂まなければならぬ。これが、即ち、本教の安心立命である。

天理教教典釋義 終

明治四十五年六月十日印刷
 明治四十五年六月十五日發行

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八拾番地

編纂者
 發行者

道友社編輯部

右代表者

增野正兵衛

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

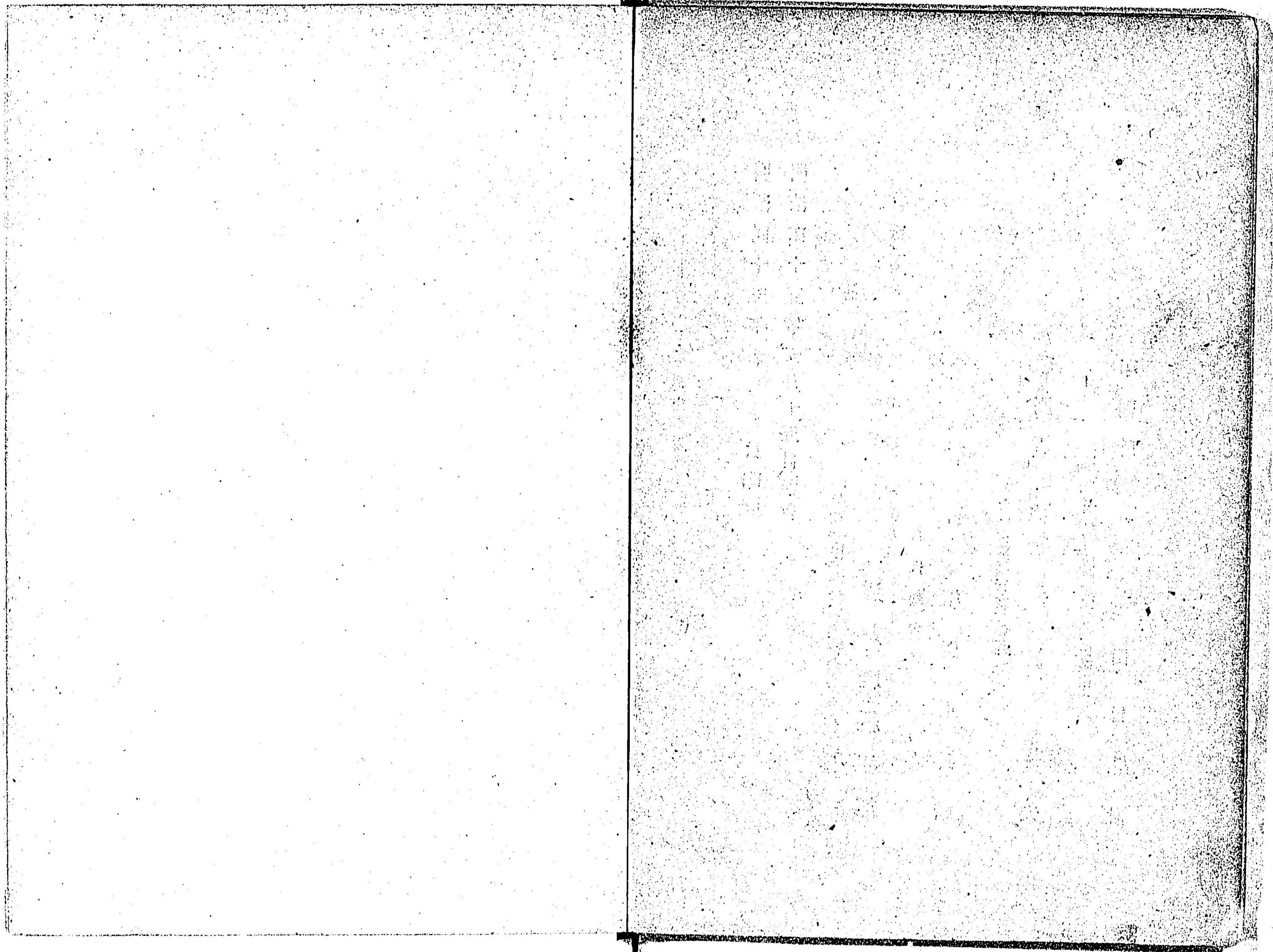
印刷者

濱田正夫

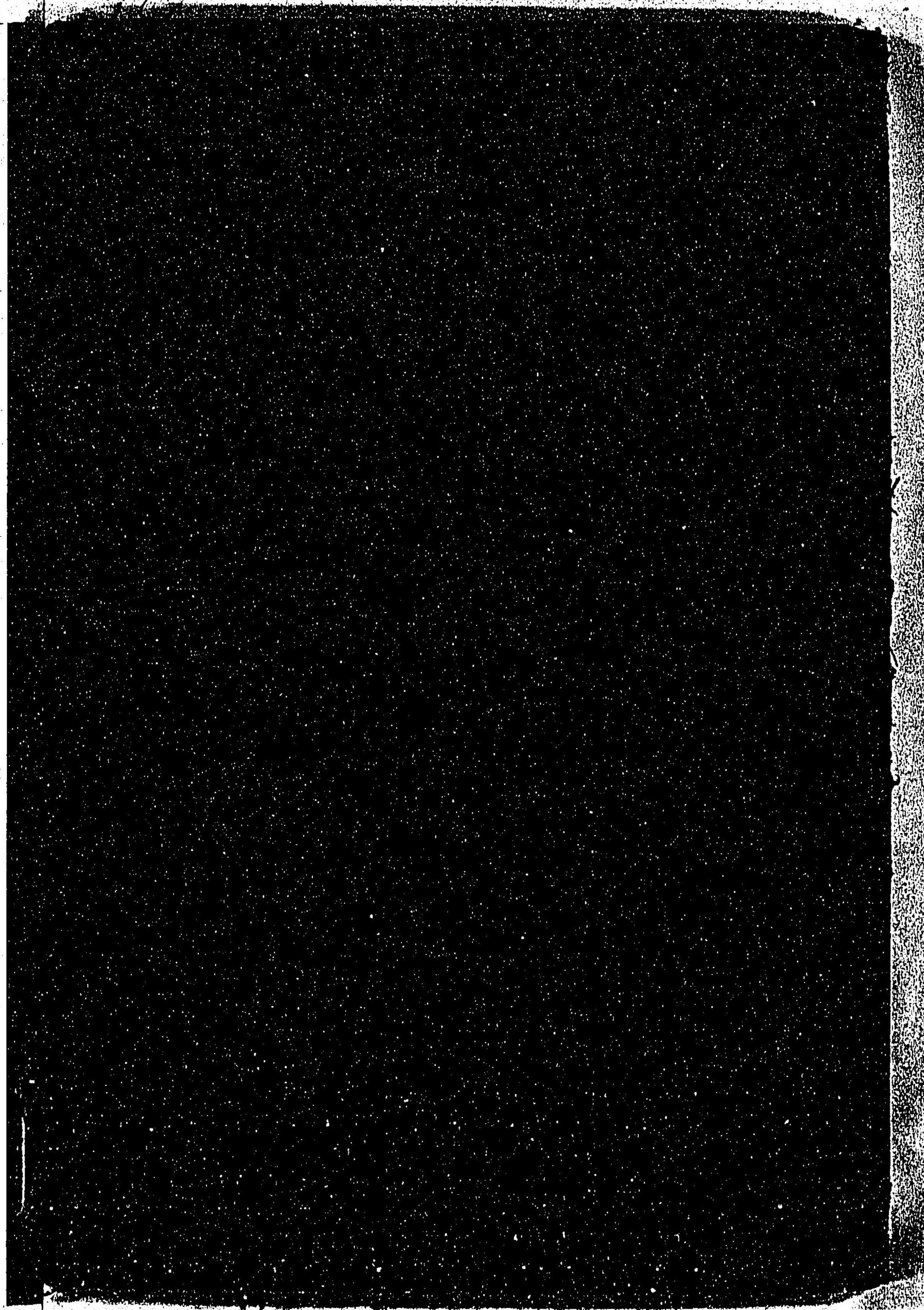
大阪市南區安堂寺橋西詰南へ入

印刷所

濱田日報社



1524
1515



324

315

014436-000-5

324-315

天理教教典釈義

道友社編集部／編

M45

ABB-0814



